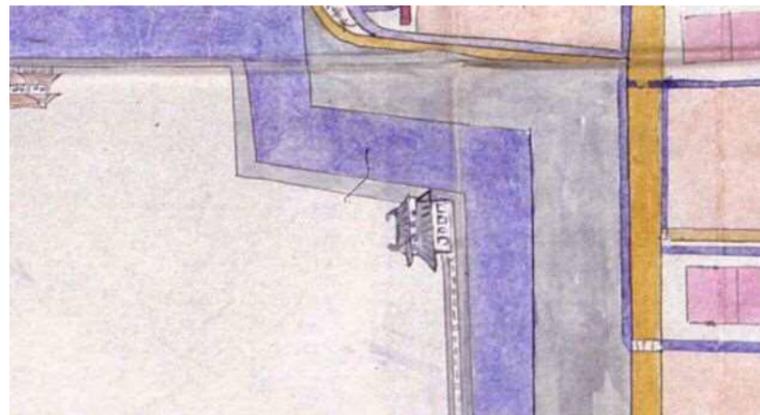
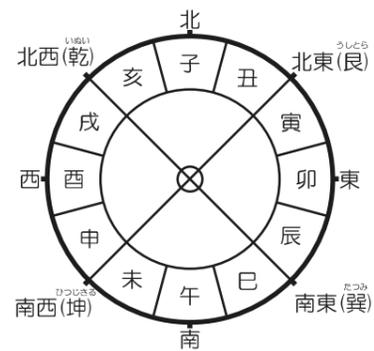




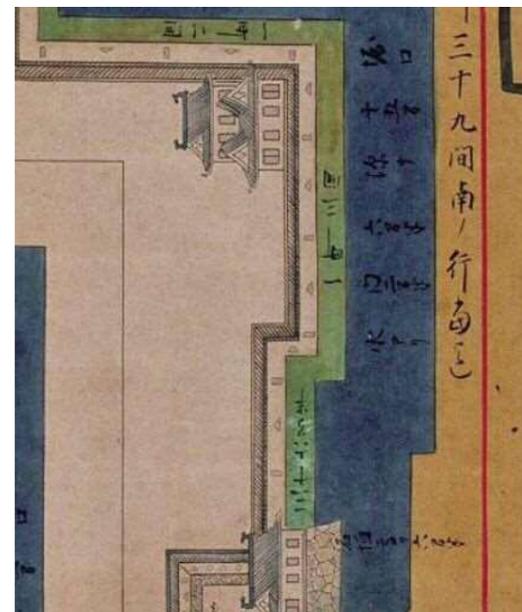
良櫓の雁木（がんぎ）
雁木とは、櫓に登るための石垣の階段です。雁木の石材は、未加工の玉石が用いられております。石垣本体との接続方法から、本体が完成した後に雁木が取り付けられたことがわかります。本来は4段ほど存在していましたが、江戸時代を通じての整地の結果、幕末には2段しか見えなくなっていました。写真は、幕末の状況です。



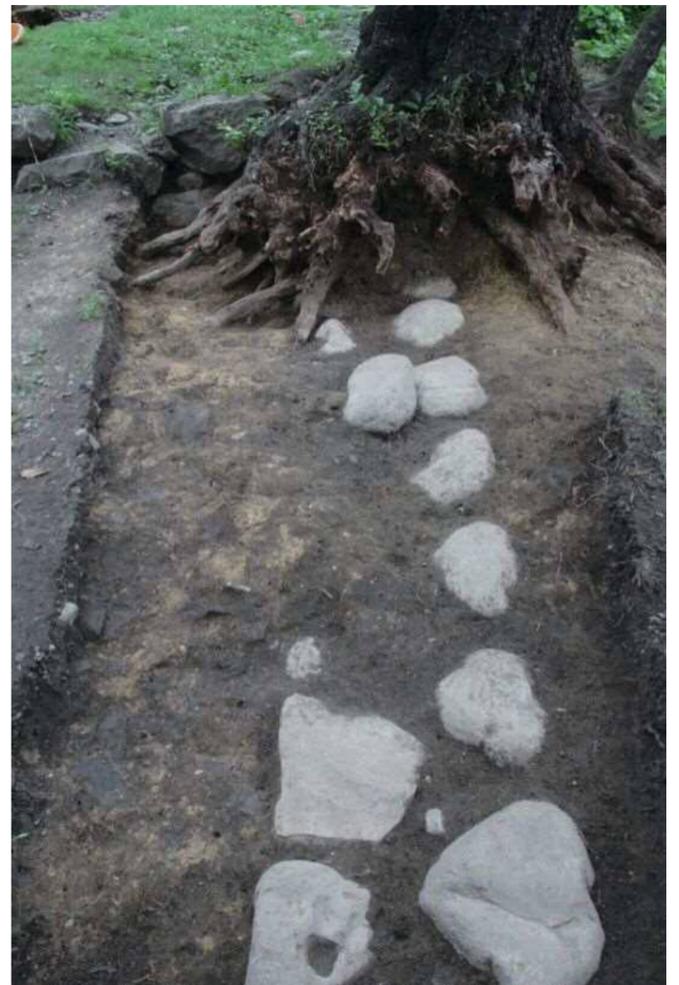
城絵図にみる幕末の良櫓（水野氏時代山形城内絵図より）



土塁の四隅にある櫓は、方向を示す名称が付けられています。



江戸時代前期の土塀と良櫓（正保城絵図より）



2 出土遺構

(1) 良櫓石垣（うしとらやぐらいしがき）

良櫓の櫓台となる石垣が検出されました。ここには、江戸時代の城絵図によると、二層の櫓がそびえていました。検出された石垣の規模は、南北約 10.4m、東西約 7.5m で、西側に雁木（がんぎ）と呼ばれる階段が設置されていました。二ノ丸土塁上の櫓石垣の調査は今回で三例目ですが、一番上で建物を支える天端石（一番上の石材で建物を支える部分）まで残存していたのは初めてです。

石垣の築造年代は、土塁の形成が元和 8 年（1622）に最上氏が改易され鳥居氏が入部した際の改修によるものなので、それと同時期であると考えられます。

石垣の高さは、1.6m 以上あったことがわかりました。ただし、時代を経るごとに石垣を埋めるように周囲が整地され、幕末には地表面からの高さは 70 cm 程度になっていました。幕末の地表面から、上の写真のように大量の瓦が出土しました。これは、明治の廃城令にともない、解体された櫓から崩落した瓦が散乱したものであると考えられます。ここから出土する瓦の年代は、幕末の年代を示すのも、廃城による瓦の廃棄であることを示唆しています。

(2) 土塀礎石（どべいそせき）

山形城の城絵図には土塁上に土塀が描かれていますが、今回の調査で、その礎石である石列を検出することができました。周囲から瓦が出土したので、この塀には瓦が葺かれていたと考えられます。瓦の重量を支えるためにこのようなしっかりとした礎石が必要だったのでしょう。

良櫓石垣の周囲では、礎石が 2 時期あったことが確認されました。土層の堆積状況や城絵図等から、石垣の外側の土塀礎石が古く、何らかの理由でその土塀が壊された後は、内側に再建されたようです。